

二次元ぶち文庫

マジックレディ
魔法淑女
ミオン
Beginning
ビギニング

栗栖ティナ

表紙イラスト：助三郎

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法淑女ミオン』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『魔法淑女ミオン』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



マジックレディ
魔法淑女
ミオン
Beginning
ビギニング

栗栖ティナ
表紙 / 助三郎

登場人物紹介

Characters

みおと

美音

かつて魔法少女ミオンとして街を脅かす魔物たちと闘っていたが、
現在では平凡な新妻として暮らしているヒロイン。

はやと

隼人

大学時代に美音との交際を始め、結婚し夫となった青年。

——東京湾沿岸、数百キロメートル。

この世の終わりが訪れたかのような大嵐で荒れ狂う海原の上空に、少女は悠然と浮かんでいた。

やや垂れ下がった大きな瞳が印象的な、おっとりとした顔立ち。ポニーテールにまとめられた色素の薄い髪が、強風に煽られてプックリと柔らかそうな頬を撫でている。

肩に掛かった、夜空を舞う蝙蝠をイメージさせる大きなマント。身体をピタリと包むのは、赤い革ベルトで飾られた黒のワンピース。大きく開いたフリル付きの胸元は、まるで少年のように平坦で、少女の■さを物語っている。

膝下まですっぽり隠す黒のロングスカートも風で捲り上げられて見えている、カモシカのように細くスラリと伸びた脚。膝上までを覆う赤いライン入りの黒いブーツが、雪原のように白い肌を際立たせている。

「……これが……『澱』の根源……何て禍々しさなの」

苺のように赤い唇をきゅつと噛み締めて見下ろす海面には、まるでブラックホールのように深い闇が渦巻いている。吹き荒れる風は、巨大なジェット機ですら紙くずのように吹き飛ばしてしまうほどの強さ。中心には鋭い牙が無数生え、獲物を待ち望むかのようにカチカチと音を立ててぶつかっている。

ストーカーのように追い回すマスコミ。アイドルを前にしたかのように歓声を上げる子

供や若い男達を中心にしたファン達。少女が姿を現す度に群れてくる彼らの姿も、今日ばかりはどこにも見えない。

見ているだけで、背筋が震え上がる底知れぬ恐怖を感じる闇。常人ならば、悲鳴を上げて逃げ出すであろうプレッシャーを正面から受け止め、正義の魔法少女は激戦で乱れた呼吸を必死に整える。

「決めなきや……絶対に！ これを封印すれば……戦いも終わるんだから!!」

「魔女」の家系に生まれ、幼い頃に亡くなった母から託された使命。

地球に巣食う魔力の「澱」を抹消する為に戦い続けた数年間。

「澱」によって現れた怪物を打ち倒し、それを悪用しようとする邪悪な魔法使い達とも戦い……人々から救世主扱いを受けるようになった正義の魔法少女——ミオンとしての日々、ようやく幕を下ろせるチャンスが訪れたのだ。これを逃すわけにはいかない。

普段は優しく目尻の下がついているミオンの瞳が、キツと猛々しく見開かれる。

同時に、その右手の薬指で赤い指輪が閃光を放ち始めた。

「これで最後だから……お願い、私に力を貸して」

鳳凰の涙。母より託された、魔力増幅の為の秘宝を見下ろし、小さく呟く。

その声が届いたかのように、放たれる閃光はますます強くなる。夏の陽光のように強い光は、海面に渦巻く闇をかき消すように照らし出す。

——グオオオオオオオ……。

闇の中から、低いうめき声のようなものが聞こえてくる。激闘の末、この人気のない海上に集めた「澱」達が、暴走しようとしている。

最早、一刻の猶予もない。ミオンは左手に持った、身長ほどの長さもあるナギナタ状のロッドを目前で水平に構え、高らかに詠唱を始めた。

「根源を司りし者よ。悠久の時を超えし大いなる光よ。我が名の下に、その力を示せ！」
空に響く、水晶のように透き通った声。少女の汚れなき心の叫びに応えるように、指を飾る鳳凰の涙が輝きを増していく。

「忌み嫌われし迷い子達を……汝が光にて、安らぎへ導きたまえ!!」
溢れる光が、手に持ったナギナタ状のロッド全体に広がった瞬間。八方に広がった光の波が、静かに周囲を包み込んでいく。

グルオオオオオ——オオオオ……。

海面に広がる闇を、ミオンのロッドから広がる光の波がドーム状に包み込んでいく。

「……さようなら。『魔法』の消えた世界では、あなた達はただ虚しく朽ち果てていくだけだから……せめて、光の中で安らかに眠って！ 究極封印魔法、クロスシールドッ!!」

気合と共に、更に大きく広がる光のドーム。やがて、光の線が海面を走り、巨大な六芒星の魔法陣を描いていく。

ブオオオオオオオオツ!!

魔法陣の中央から放たれる、太い柱のような光。強烈な衝撃波が、ミオンの小柄な身体を吹き飛ばさんばかりに揺らす。

ロングスカートが完全に捲れ、可愛らしいピンクのショーツが丸見えになってしまうのも構わず、ミオンは必死の形相でロッドを構えたまま念じ続ける。

グルオオオオオオ——オオオオ……。

最後に残った闇の渦も、低い断末魔の声と共に、光の柱に吸い込まれていく。

辺りに吹き荒れていた暴風も治まり、荒波がうねっていた海面も嘘のように凜ぎ、静寂が広がっていった。

「……終わった……かな？」

海面に描かれた光の魔法陣が、そのままゆっくり海中へと沈んでいくのを見守りつつ、ミオンは息を切らしながら呟く。

自分のすべての魔力を注ぎ込んだ封印魔法陣が消えていく……それが、魔法少女としての任務を終え、彼女が普通の「女の子」に戻った瞬間だった——。

「……はうっ!!」

小さな悲鳴と共に、美音はばね仕掛けの人形のような勢いで飛び起きた。

慌てて左右を振り向いて確認する。ダンスと小さな鏡台だけが並ぶ、明かりの消えた真つ暗な部屋。見慣れた自宅の寝室に間違いない。

「夢……だったのね。はあ……」

深いため息をつきながら俯くと、額に浮かんだ冷や汗が、ゆっくり垂れ落ちていく。

「何で今更あの頃の夢を……」

魔法少女ミオン。本名である美音の読みを変えて名乗り、一家に代々伝わる衣装を身に纏い、「澱」によって生み出された怪物達と戦い続けていたのはもう十年も前の話。

プックリとした頬、朱の鮮やかな唇、優しさを映し出すやや垂れた瞳。少女の面影をはつきりと残しながらも、その肢体は見事な成長を遂げている。

以前より若干肉付きのよくなった太股。空色のネグリジェのレースの裾から覗く肌は、かつての白さに桜の花びらを溶かし込んだような、微妙な桃色に染まっている。

熟れた白桃のようなヒップも昔より一回り大きくなり、柔らかそうに弛んでいた。

圧巻なのはネグリジェに透けて見える胸の双乳。少女の頃は、男の子と大差ないほど凹凸のなかったそこが、今では大きなメロン大にまで成長している。町を歩いていると、すぐに男達の無遠慮な好奇の視線が集まってくる魅力的な乳房。少女時代は早く大きくなって欲しいと願ったものだが、最近では逆に少し縮んで欲しいと思うくらい。

昔と同じポニーテールも、肢体の成長に合わせるように伸びている。

垂れ流れる白濁が、黒いワンピースの布地に染み込んでいき、お腹の辺りまでまだらな汚れを作る。粘着質な汁のせいで、食い込むワンピースドレスが肌と隙間なく張りつき、擦れる刺激が更に強くなってしまった。

「み、美音お……くっ、し、しっかり……はあ……」

「隼人さん、ご、ごめんなさいっ！ こ、こんなあ……こんな、感じちゃ駄目なのにっ、うう……はあうううっ！」

「こんだけデカパイ熱くしといて、感じちゃ駄目もないだろう？ ほら、うるさい口は、こいつで栓してやるぜ!!」

正面から乳房を突いていた男の一人が、悲痛な叫びを上げる紅い唇目掛け、自らの怒張をねじ込んできた。

「ひっ、おごうっ！ んんんんうっ?! ちゆるるるううっ、りゅっ、ぷはあっ！」

唇の端が裂けてしまうのではないかと言うほど広げられ、強引に突き入れられる肉竿。

粉薬を片栗粉で溶いたような、咽喉にどっぷりと引つかかる苦い先走り汁。雄臭い臭気が鼻を突き抜け、それだけで失神してしまいそうになってしまう。

愛する夫の精液ならば、最近は自分から進んで飲ませてもらうこともある。だがこれは自分のよく知るあの味とは大違いの、おぞましい汁だった。

「んんじゆるるっ、うぐうっ、ああああっ、はあ、はぐう……ちゆるるるううっ！」

ねじ込まれた肉竿は、苦しむ美音にお構いなく前後激しく動き始める。垂れ流れる汁を無理に咽喉の奥までねじ込まれ、吐き気がますます強くなる。

「おらっ、人妻になったなら、舌の絡ませ方くらいは知ってるだろ？ 手を抜くと、お前の大事な旦那をぶっ殺すぞ！」

（そ、そんな……ああ……）

涙で滲む瞳で、ぐったりとする隼人の姿を確認する。欲望に支配された男達……命令を聞かなければ、容赦なくその脅しを実行するだろう。

愛する人を救う為に、愛する人の目の前で他所の男に奉仕しなければいけない。究極の選択を突きつけられ、頭を横殴りされたような衝撃に眩暈を覚える。

（でも、やらなきゃ……はあ、はぐう……んっ！）

覚悟を決め、口内の侵入者に恐る恐る舌を伸ばしていく。

「み、美音おっ！ やめろ……俺の為にそんな……くうっ……やめてくれえっ！」

鼓膜を揺らす、愛する夫の悲痛な叫び。愛妻が別の男の肉棒を咥えようとしているのを目の当たりにしているのだ、その心痛は察して余りある。

「ごめんさい、あなた……でもね、こうしないと……駄目だからあつ！」

夫の目の前で、夫を裏切る真似をしなければならぬ。その苦痛を咽喉の奥に飲み込みながら、意を決し、肉竿を咥え込んでいく。

ちゅぱあつ、ちゅううつ、ちゆるうつ！

口いっぱいに広げられている為に巧みに動かすまではできず、せいぜい裏筋の部分を舐め上げるのが関の山。

ざらつく筋に舌を触れさせただけで、肉竿は歓喜にむせび泣くように激しい痙攣を始める。振動で、唇が痛いくらい押し広げられた。

舌に染みる、塩っぽい肉竿の味。ひと舐めごとに味が濃くなり、射精を予感させる。

(まずい……気持ち悪い……ああつ、こ、こんな……はあ……ああ……)

吐き気を催す汚辱感。だが、食道をヌルヌルとした粘液が胃へ流れ落ちていくのに合わせて、肌の火照りが増すのを感じる。

肉棒塗れの乳肉の感度も増し、時折、意識が白く染まる快感を覚えるほど。

「そろそろだあつ、たつぷり口の中にぶちまけてやるぜ!!」

「俺もだ……くつ、デカパイでこんな気持ちよくなれるなんてなあ」

「まったく、昔TVで夢中になってた魔法少女が、こんないやらしいな身体になったなんて悲しいぜえつ！ 悲しくてチンポから白い涙が噴き出しそうだ!!」

口、胸。それぞれを突き犯す陵辱者達の動きが、容赦なく早まっていく。

ぐにゆるるうつ、ぐににいっ、ぶにゅううつ！

まるでパン生地のように、熱心に突かれ捏ねられる乳脂肪。とうとう布地の端に引つか

かっていたニツプルも飛び出し、半分以上が露出してしまふ。

全体がほのかな桜色に、ツンと堅く立つ乳首粒は紅く染まっている。肌全体が快樂に打ち震えて波立っていた。

「おおおっ!? んぐううっ、じゅりゆるるうっ、あむうっ、はぐうううっ!」

咽頭まで押し潰されるほど、深くまで突き刺さる肉棒。呼吸がほとんどできなくなり、意識が遠のく。そうなることで、かえって身体中に走る快感がくつきり浮かび上がった。

「おおおっ、ふああっ、ひやあああああああああ!」

快樂の火花が胸の中でいくつも弾け、それが爆発の如く快感へ膨れ上がった瞬間。

「で、出るぜえッ!」

「ミオンちゃんをドロドロに汚せる……最高だあつ!」

ゴブブブウウウッ! ドブリユウウウウウウッ!!

激しい音と共に、口と胸の肉竿達が一斉に弾ける。

飛び出す白濁。垂れ流れていた先走りより数倍濃厚な雄汁が、白桃のような乳房をあっという間に染め上げる。

ワンピースドレスのあちらこちらにも飛び散り、黒い布地がシマウマのようなまだらに染め替えられた。

「おおおっ……んんんじゅるるるうう、はぐうっ、んぷうあああああああ!」

咽喉の奥で迸る精液。完全に口を塞がれていて吐き出すことも許されず、窒息を免れる為には必死に飲み下していく。

蒟蒻ゼリーを一気に押し込まれたような苦しき。なかなか食道をスムーズに流れ落ちてはいかず、激しくむせ返ってしまう。

「ごぼおつ、おごおつ、はあつ、んんんんっ!？」

「みつ、美音……こ、こんな……畜生……」

遠のく意識の中、悔しげな隼人の呟きが鼓膜を揺らす。

(隼人さんの前で……こんな、精液でドロドロ……嘘、嘘お……)

夫の前で晒してしまった痴態。嫌悪していただければ自分には言いかねたが、こんなに熱く震える肌を見られては誤魔化すことはできない。

(隼人さん以外の男の人で感じちゃった……駄目、こんなこと……)

妻としての貞操観念。魔女の一族として澀と戦い続けなければならぬ使命感。自身が決して失ってはならない二つを裏切る行為。いくら魔力を失い、隼人を人質に取られているとはいえ、決して許されることでない。

「ふうっ、なかなかよかつたぜ、ミオンちゃんのお口は。ぎこちないところが、かえって魔法少女っぽくて興奮しちまつたぜ」

満足げな声と共に、口を埋めていた肉棒が引き抜かれる。

「おおおつ、ごほ、ごほおつ!! はあ……はあ……ああ……」

口に残った精液を必死に吐き出しながら、呆然と座り込む以外にやれることはない。指の「鳳凰の涙」は完全に光を失っている。理由はわからないが、かすかに残っていた魔力すら完全に失い、最早、今の美音は普通の人間と変わらぬ状態。

(このまま……負ける? 澱に犯されて……隼人さんも助けられなくて……)

白濁でパックされた口元を半開きにしたまま、絶望的な現状に身震いする。

「なんだあ、元気がなくなっちゃったなあ?」

「俺達のザーメンぶっかけられて気持ちよすぎたんじゃないか? ははっ、ミオンちゃんはエッチだなあ」

「どれ、いやらしい魔法少女……みんなで本格的に使わせてもらおうぜ!!」

一度放ったというのに、まったく衰えを知らない男達の肉竿。虚ろな瞳で取り囲む怒張を見つめる美音の身体が、後ろから乱暴に抱え上げられてしまう。

「ひゃんっ! なっ、何を……ああっ……」

「おら、動くなよ……へへっ、こんな体勢でどうだい?」

極太の腕が、今度はむき出しの太股をしつかりと掴む。そのまま宙に抱え上げられ、まるで幼子が用を足すときのようなM字開脚姿勢を強いられた。

「いい眺めだな。欲を言えば、昔の姿の方が、子供っぽくて燃えただけだなあ」

舌なめずりをしながら、特に大柄な男がゆつくり広げられた股の間に身体を滑り込ませてくる。ペットボトルより一回り大きい巨根。ほぼ垂直にそそり立っているそれが、ショーツの上から淫裂に押し当てられた。

くちゅうっ、じゅぶう、じゅぶう……。

「ふあああつ、何を……くうううっ……あつ、はあ、はう」

先ほどよりも大量の蜜液で濡れた薄いレースショーツ。奥のピンク色の花びらが透けて見えるほどに張りついている。

その中央に、赤黒い先端がわずかに沈む。そのまま力強く右へ引つ張られると、布地がビラ肉から剥がされて、少しずつずらされていった。

「はぐうっ、ひいっ、アソコ……引つ張られえ……てあああああつ！」

ネッチヨリと張りつく布地は、肉皺が消えるくらいに膣肉を引つ張る。敏感な粘膜肉に生まれる快感。少しずつ露出し、冷たい外気に撫でられると火照りが一瞬冷まされて、刺激に膣口がキュッと音を立ててしまう。

黒い布地が右へ寄せられ、薄い茂みの奥に隠されたピンク色の雌花と、その下の小さく窄む菊蕾までがほとんど露出する。

「見ないでっ！ 駄目、ここ、恥ずかしいところ……ああっ！」

卑人以外に見られたことのない女の部分を人目に晒され、耐え難い羞恥に湯気が上がり

そうなくらい顔を赤らめる。

正面で好色な笑みを浮かべる男の顔。それが、これから行なわれようとしている悪夢をはつきりと予感させる。

この体勢、露出させられた秘部。目の前には猛り狂う男のモノ。そこから導き出される答えは——一つ。

「い、いやあああああああつ！ やめて、許してえッ！ いや、隼人さん以外の人となんて絶対に……絶対にいやああああああつ!!」

「つれないこと言うなよ、ミオンちゃんよお。俺、昔、あんたのファンで追っかけまでやってたんだぜ？」

「そうだよ、俺達がミオンちゃんを思って、何度チンポしごいたと思ってるんだ！」

「ああ。毎度毎度、ご丁寧にパンチラサービスも見せてくれてよお。毎回、ニュースでその場面だけ録画して抜きまくったもんだぜえ！」

「そ、そんなあ……」

男達の告白に、美音はただ呆然と唇を震わせる。

この地球を……そして人々を守る為、少女としての幸せな日々すべてを犠牲にして戦い続けていた。そんな自分の姿を見て、男達がこんな邪な妄想をしていたなんて。

(うそ……信じられない……そんなあ……ああつ)

胸に広がる絶望。信じていたものに裏切られた衝撃が、かつて人々の救世主として戦い続けたという美音の思いを粉々に打ち砕いた。

それなのに、何故か曝け出された膾炙が、快感を表すようにキュンとビラ肉をヒクつかせてしまう。無数の男達が、かつて「魔法少女」だった自分の姿で発情していた。そう思えば思うほど、胸の奥にどす黒い悦びが生まれてくるのを抑えきれない。

(どうして、なんで……嫌なはずなのに……嘘おつ)

心の中で何度も繰り返す否定するが、意識すればするほど、その悦びが全身をますます敏感にしていける。

「へへっ、そんなわけですよ……昔、散々あんたでオナつてた男達へのサービスだと思つて、頑張ってくれよ!」

「オマ○コこんなにヒクヒクさせてよお、オナペットにされてたのが嬉しかったか?」

「そ、そんなの違う! 違います! わ、私はもう隼人さんのものなんだから……他の男の人となんて絶対……ああ……」

「ふんっ、正義の魔法少女も、すっかり色狂いのデカパイ雌牛になっちまったのかよ。嫌だつて言いながら……ここを面白いくらい濡らしてよおつ!!」

不機嫌そうに叫んだ男が、ショットをずらした肉竿を直に蜜花に押し当てる。

じゅぷう……ちやぷうつ……。

小さくなる卑猥な水音。ヒクヒクと小刻みに動く肉花芯を押し広げる怒張。柔らかい肉がミチミチと潰され、膣道全体が震えるような痺れが走る。

隼人だけに捧げた女の操が奪われようとしていることを、何より実感させてくれるおぞましい感覚。子宮までが恐怖に収縮してしまふ。

「やめて!! 隼人さん、あああ、駄目……駄目えええつ!」

「み、美音……美音……くうう……ああ……」

叫ぶ声に、弱々しい隼人の呻きが返ってくる。今にも死んでしまいたいそうなくらいポロポロの姿でも、必死に美音を守ろうとその身を案じてくれてるのが伝わる声。

その思いに応えたい。強く願っても、肝心の魔力は一向に戻ってくる気配がない。

(このままじゃ、本当に! 駄目……駄目……あああつ)

絶望に唇を戦慄かせ、必死に奇跡を祈り続ける。かつて澀と戦っていた頃も、命の瀬戸際の窮地から、幾度となく華麗な逆転劇を見せてきたではないか。

だから、今も……今もまだ諦めずに――。

ズブリュルルッ! ズルウツ、ジユブボボボボボボボボオツ!!

「があつ……あぐううううつ、ひゃあああああああああ!」

淡い期待を吹き飛ばす、引き裂かれるような激痛。蜜液に濡れた膣肉をこじ開けて、奥へ進む怒張の感触。ビリリッとし引き裂けるような音が、子宮まで揺らす。

まずは、両手に熱く滾る肉棒を無理矢理握らされる。太すぎて、指が回らないほどの極太棒。既に染み出していた白濁があつという間に指に絡みつき、それをローション代わりに男達の動きに合わせて指のリングの間を激しく往復する。

肘の間、腋、膝……肉竿を挟めそうな場所ならば、とこころ構わず肉棒が押しつけられる。乳首まで零れ落ちた双乳にも、太股にも、再び肉棒が突き込まれた。

隙間なく取り囲む肉棒の檻。身体中に灼熱の感触が広がり、頭が蕩けてしまいそうだ。

「ひあつ、い、いっぱい……こんなたくさん、ああつ……ぐうつ、ひゃあつ！ おぐうつ、んんんんつ、じゆるるるるううつ!!」

息も絶え絶えに呆然と呟いた直後、首を強引に掴まれて、口にも怒張がねじ込まれる。

「自分で言ったんだからあつ！ 全員分、一気に満足させてくれよ！」

美音の意志など、まるでお構いなし。男達は自分で好き勝手に腰を振り、その熟れた身体を蹂躪し続ける。

じゅぶうう、ぐちゆうつ、ぬちゆ、ずりゆううつ!!

全身から響く、卑猥な水音。肌やワンピースドレスに浴びせかけられた白濁が、雄棒で擦り泡立てられる音。まるで、身体全体が淫音楽器になったようだ。

「み、みお……とお……しっかり……」

「ひごおつ、んんんんつ!! ふあああつ、ひうつ、ああああつ！ んんんんつ!! ご、ごめん

なしやああ……は、はやとお……ひやあああつ！」

咽喉の奥に叩きつけられる剛直。呼吸もままならず、氣遣う夫に謝る言葉も声にならない呻きにすり替わる。

絶え間なく身体を駆け巡る衝撃。二つの淫穴を限界まで広げる圧迫感。氣を失いそうな苦痛を、敏感な肌を擦る肉竿の刺激がどす黒く塗り潰していく。

軽く麻酔を撃ち込まれたように、全身の筋肉が弛緩する。

「へへっ、いい具合に力が抜けて動きやすくなったなっ！」

「くうっ、人妻だけあつて、マ○コは随分こなれてる……こんななぶつといのを榮々啜え込めるようになったちゃったなんて……清純な魔法少女も今や昔だな！」

若干緩くなった膣穴と腸道を、二本の怒張が容赦なく前後する。肉壁の皺がすべて消えるほど強く抉るカリ首。薄い壁が二本の剛直で削り取られ、膣道と腸道が一つにつながり卑猥な穴へと作りかえられていくような錯覚すら感じる。

細い縦筋だった小陰唇も、今や真円に限りなく近くなるほど拡張されている。肉竿を根元まで埋められた菊穴と入り口部分もつながってしまっそうだ。

「おら、どうした、マ○コヒクヒクとすげえじゃないか！ すっかり淫乱に育ったミオンちゃんは、旦那の前で犯されて感じてるのかあ？」

ずぶりゅううっ、じゅぶぶぶ、じゅぽおっ、ぬりゅうう！

「んんぐううつ！ んぶうつ、あみゆ、くふああつ、あむうううつ!! か、感じるうつ、ち、ちがあ……そんな……ひやぐううつ！」

二本の肉竿が交互に出入りし、膣内でカリ首同士が交差する瞬間が特に鮮烈な刺激が走る。膨らむ亀頭がギリギリまで入り口まで出てくると同時に、掻き出された白濁と蜜の混合液が両方の穴から零れ落ちる。生クリームのように泡立つ液体は、ずらされたショットに染み込むだけでは収まらず、そのまま地面にボタバタと落ちていった。

「美音……くう、し、しつかり……そんな……」

「ひぎうう、じゅぶぶぶうつ、んんつ！ あああつ、やあつ、壊れる……壊れちゃ……んんんつ!! はあ、隼人さんの前え……感じちゃ……らめなのおおつ、んんつ！」

突き上げられる衝撃。前と後ろから、最奥で小さく震える子宮が打ち叩かれた。早く愛の証が欲しいねと、毎晩のように隼人のモノを注ぎ込んでもらっている場所。

そこを突かれることが、陵辱の絶望感を一層際立たせてくれる。収縮し、痙攣する子宮の中で、暗い炎が燃え上がるようだ。

（も、もう……何がなんだか……ああつ……熱つ、身体——くううううつ!）

苦痛と絶望が、ブレイカーを落とすように各神経を麻痺させていく。唯一残った快樂神経。尾骨から脳天まで響く快樂の波が、津波のような勢いで襲いかかってくる。

「あひいつ、ぐうつ、はあうううつ、んんんつ！ おチンチンすごお……あああつ！」

「へへっ、正義の魔法少女も、こんなにチンポ塗れになっちゃ形なしだな！」

「ああ……そろそろだあつ、ポチポチ出ちまいそうだぜ!!」

少しずつ甘さを増す美音の声に刺激され、男達の動きが早まる。

乳房に埋まる肉棒が、飛び出す乳首粒に押し当てられる。そのまま、乳輪の中へ無理矢理戻されるように突かれると、尖った果実がミチツと潰れて沈んでしまう。先端が挿し込まれる鈴口に刺さり、きつく締めつけられて千切れそうだ。刺激が胸の芯まで走り、乳房全体が揺れる。辛うじてワンピースドレスに収まっていた下乳も、その衝撃で飛び出してしまった。

「凄いな、ずっぷり埋まって、パイオツマ○コになってるぜ！」

「おおおつ、んぐ、あああああつ！ お、おっぱい……おっぱいまでおチンチンうつ!!」

初めてのニップルファックに呆然としている間に、手や脇の下、膝裏や太股で扱かされている肉竿達も硬さを増していく。最早くすぐったさを感じることもなく、肌やワンピースドレスが破けそうなほど擦られると、それだけで背筋が仰け反ってしまった。

「美音……美音……」

か細い隼人の声に、最早悲鳴を返す余裕もない。

夫が全部見ているのに……意識すればするほど理性が闇に沈み、そっくりそのまま暗い快感にすり替わってしまう。

「ひやううつ、んぶうつ、はあつ、はぐうう、んんんんつ!! ご、ごめんしやあ……いいいいつ!! きもひいつ、いいつ! あ、あはあつ……おチンチンうつ!」

肉竿で埋められた唇の端から、たまらず漏れてしまう嬌声。

隼人を救う、澱を封じる。その使命を思い出す余裕もなく、ただ全身を支配する快樂に喘ぐことしか考えられなくなる。

「へっ、随分気持ちよさそうになつてるなあ。どうした? 魔法少女さんは、怪物をぶつ倒すよりも、チンポで犯される方に夢中なのか?」

「旦那の代わりに自分が相手するとか格好つけてたけどよ、本当はこうやってチンポ塗れにされたかっただけなんじゃねえ? あくあ、あのミオンちゃんがこんなドスケベになつたなんて信じたくねえなあ」

「ひ、ひわあつ——ないでえつ、ええええつ! うぐううつ!! あなたあ……ごめんなひやああ——いいいいつ! か、感じてえ……真つ白おつ、まつひろおおおつ!!」

男達の嘲りに言い返す気力も湧き上がらない。内臓が引きずり出されそうな膣穴と尻穴のピストンに、飛び出しかけた声も押し戻される。

（駄目、おかしく……おかしくなるうう……こ、こんなあつ! ああ、オマ○コとお尻、勝手に気持ちよくなつて……くううつ!）

膨れ上がる快樂に、耐えきれずに心が屈服してしまふ。一度折れると、押さえ込んでい

た快樂が一気に血流に乗って全身を駆け巡る。

キュウキュウと意識せずに膣と腸道がきつく締まり、貫く怒張の感触を深く味わおうと蠢いていた。

「くっ、いい感じに締まるな……そろそろだあつ！ みんな、そろそろぶちまけてやろうじゃねえか!!」

「ああ、このいやらしい魔法少女、真っ白に染めてやろうぜ！」
ぶびゅううううっ、ずりゅうううっ、じゅぶぶぼぼおっ！

男達の叫びと共に、身体中の肉棒の動きが一斉に加速する。

子宮口までこじ開けるほど届く膣穴の怒張。同時に突き入れられる尻穴の肉棒が、押し上げられた子宮を更に潰す。内臓がごちゃ混ぜになりそうな圧迫感が、今は目も眩む快感にすり替わってしまう。

「はぐううっ、んんんっじゆるるうっ、はあああつ！」

口を埋める肉竿に、無意識のうちに舌を熱く絡め始めていた。隼人のものとは比べ物にならないくらい生臭く、おぞましい白濁。だが、発情した今は、その濃厚さが何故だか妙に美味しく思えた。

「美音……美音……くっ、し、しっか……あぐ……」

「ご、ごめんなひゃあつ……れもお、も、もうう……オチンポ……あひやうううっ！」

夫のうめき声を聞きながら、高まる甘美を抑えきれない。夫の身を守る為という言い訳も通じないくらい、身体中が肉竿の刺激を求めて熱く震える。

「あぐうつ、んんんっ！ す、すごお……か、身体中気持ち……いい……あああっ！」

唇の端から漏れる甘声。うっとり目を細めた刹那。

「いくぜっ！ 中に、中に出して——くうううっ！」

「ひやつ、な、中……それ……いやああっつ、子供おつ、赤ちゃんやああっ！」

「へへ、いいじゃねえか！ 俺のチンポで子供孕んでくれよおっ！ 魔法少女に種付けできるなんて……燃えるぜえ！ 俺が次世代の魔法少女のパパだなあ！」

「い、いやあああああつ、そこ、そこは隼人さんの子供だけえ……ひやああっ！」

擦れた声の宣告に、一瞬だけ正気に戻った直後。

ドブリユウウウウウツッ！ ジュブブウウウツッ！ ドク、ドクウウツッ！

子宮口に密着する亀頭が弾け、マグマのような白濁流が力強く放たれる。呼応するように、同時に尻穴でも始まる爆発。パイプのように痙攣する二本の怒張は、肉壁越しにゴツゴツぶつかりながら淑女の胎内に迸りを注ぎ込み続けた。

「ああああ——し、子宮、中、中にいいっ!? できるう……赤ちゃん、ああああっ！」

子宮を膨張させる白濁液。その焼けつくような熱感に、恐怖と共に痺れるような快感が湧き上がる。夫以外の精液で妊娠してしまったらどうしよう？ そんな絶望も、すぐさま

下腹部が爆発しそうな甘美で塗り潰された。

「俺達も出るぜっ！ くおおおおっ！」

ぶりゅうううううっ！ じゅぶりゅうっ、ぶりゅうううううううっ！！

「どろどろお……ひゅふうううっ、はああ——つくうううううううっ！！ 隼人さん、ごめん……ごめんなさあああ！ ——子宮、隼人さん以外の精液でえ……いくううううっ！」
海の果てにまで届くような大絶叫。それに合わせ、他の部分を弄んでいた肉棒達も一斉に射精を始めた。

乳輪に埋もれたまま、精を放つ怒張。すり鉢状に凹んだ桜色の輪の中に、どろりとした精液が池のように溜まっていく。手や腋から抜け出し、八方から放たれる白濁。ボコボコとワンピースドレスとスカートの上からでもはつきりわかるくらい膨れ上がった腹。太股から黒いブーツに包まれた足先まで、あつという間に真っ白に染め上げられた。

一瞬遅れ、口の中に押し込まれていた怒張も爆ぜる。スプリンクラーのように、顔中に飛び散る熱いスペルマ。

「ど、どろどろお……はふううっ、きゃふうううううっ……あつ、はああ……」

精液でバックされた顔が、恍惚に蕩ける。真っ白に塗り潰されたワンピースドレス。身体の外から芯までが男達の汚辱液で満たされた。

「美音……美音お……くうう……あああ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>